

道標

私はいわゆる「55年体制」が誕生した年の生まれで、半世紀以上生きて初めて本格的な政権交代を目の当たりにすることとなった。今回は、鳩山新政権の目指す「脱官僚」の政策運営について、私自身の官僚駆け出しのころを思い出しながら考えてみたい。

私は大学卒業と同時に経済企画庁（現内閣府）に入り、14年間の官

仕えを経験した。初出勤の日いきなり国会答弁資料の作成のため徹夜させられたことは今でもよく覚えている。役所では、質問予定の議員から質問内容を事前に聞き出し、模範答弁や参考資料を用意して、大臣が首尾よく答弁できるように進講しておく、という裏方の仕事に相当のエネルギーを注いでいるということがよく分かった。

元官僚による脱官僚

巧みな人材再利用術



山内 直人
大阪大国際公共政策研究科教授

野党議員のなかには質問を事前に教えてくれない人もいたが、自民党議員からは「どんな質問をしたらいいか」と逆に聞き返されることもあった。そのときは、与党議員なんてそんなもの

山内 直人

のが模範答弁であると言われる。よくいわれるように「検討する」は「検討しない」という意味なのである。

したがって、高速道路の無料化、羽田空港の国際ハブ空港化、高校の実質無償化といった政策のコペルニクス的転換は、官僚任せでは絶対にありえない。脱官僚の真骨頂はこのあたりにありそうだ。

官僚が所属する官庁に忠誠を誓い、身をささげるのは、退職後も含めその官庁に面倒を見てもらえるからだ。私自身は40歳になる手前で大学に移籍したが、その後も役所に本籍が残っている

かと思っただが、いまから言えば、政官の馴れ合いを象徴するエピソードだったといえるかもしれない。

霞が関は基本的に前例主義の世界で、従来の答弁を繰り返しつつも、いかにも前向きであるかのようにみせる

た。数年後、もう霞が関に戻らないと決心したとき、はじめて出身官庁の呪縛から解放されたように思えた。

官僚にとって人事処遇は最大の関心事で、天下りもその延長線上にある。新政権が天下り規制の強化を打ち出し

ふるさと伝言

ているのは、官僚の出身官庁への過度の忠誠心を削ぐのに有効で、正しい方向だと思ふ。

周知の通り、民主党所属の国会議員の相当数が元官僚であり、新政権の閣僚や副大臣、大臣政務官にも多数起用されている。思つに、役所の内部事情に通じた官僚に選挙で禿をさせて、生粋の政治家のように使う、巧みな人材再利用術である。いわば「毒を以て毒を制す」というわけだ。

実は、政界以外でも、学界、経済界などさまざまな分野で霞が関を若くして飛び出した元官僚が活躍している。とかく批判の多い官僚機構であるが、人材の供給源としての霞が関はまだまだ健在なのではないだろうか。

民主党は、国家公務員が定年まで働ける環境をつくとマンIFESTで謳っているが、それは逆ではないか。むしろ、役所のあっせんにならない官民の自由な人材移動をもっと促進して、官僚の純血主義やエリート意識を是正することこそが重要だと思ふ。

(やまうち・なほと、松山市出身)